

分離された社会空間に移動する

イタリア在住フィリピン系第1.5世代の移住経験

広島大学 長坂 格

1 目的

国際移住者の子供たちについては、これまで、移住先で生まれ、社会化された移民第二世代、あるいは移住した親たちに残されて出身地で暮らす子供たちに焦点があてられることが多かった。また、移住する主体を成人と想定する「大人中心パースペクティブ」が支配的だった移住研究においても、子どもの移住経験が中心的に論じられることは少なかった。そこで本発表では、移住者の子どもたちの移住に焦点を当て、彼らが、いかに彼らの家族および自分自身の移住を経験したのか、そして固有の移住システムの中で移住することでもたらされる生活上、感情面での課題にいかに対処してきたのかを記述し、考察することを目的とする。より具体的には、フィリピンからイタリアへと移住し就労する親を持ち、フィリピンで幼少期の大半を親から離れて過ごし、その後学齢期に親が就労するイタリアへと移住し、イタリアで就学した、あるいは就学している人々、すなわちここでイタリア在住フィリピン系第1.5世代と呼ぶ人々を対象とする。そして、彼らの出身地社会、移住先社会での生活を、諸制約のなかでの社会関係の再編成のプロセスとして描き出し、その理論的含意を示すことを試みる。

2 方法

2つの異なる時期に実施された調査による資料を用いる。まず、移住者の子どもたちが編入していくことになるイタリアのフィリピン人コミュニティの歴史的形成過程を描き出すために、1990年代から2000年代前半にかけて実施された、フィリピン北部の農村部の出身地コミュニティとイタリア・ローマの移住先コミュニティでの調査で得られた資料を用いる。ここでは、相互に作用しつつ進展してきたイタリアにおけるフィリピン人の家事労働職への集中と、連鎖移住の結果としての、出身地社会の社会生活との顕著な連続性を持った移住者コミュニティの形成を跡付ける。次に、2010年から2013年までにイタリアとフィリピンで断続的に実施された、イタリアへの移住者の子どもたちへの聞き取り調査で得られた資料を用いて、彼らの社会関係の再編のプロセスを記述する。

3 結果

1990年代までにフィリピンからイタリアへ移住し、家事労働者として就労する親たちの多くは、子供をフィリピンを残し、親族などに預けていた。しかし2000年代以降、イタリアでの生活状況の安定化などにより、子供を呼び寄せる事例が増大した。発表では、これら移住者の子どもたちの家族呼び寄せによるイタリアへの移住のプロセス、および移住後の生活経験に注目する。具体的には、①移住へのアンビバレンス、②移住後の、再結合後の家族への適応、第一世代によって形成されてきた移住者コミュニティへの適応、イタリアでの学校への適応のプロセスについて報告し、それらを出身地での生活経験、および第一世代の移住パターンとイタリア都市部の社会経済状況と密接に関わる移住者コミュニティの諸特徴—同一職種に就く親族を中心に構成されるコミュニティ—との関連で考察する。

4 結論

これらの実証的知見を踏まえ、最後に、①従来、第一世代あるいは第二世代と一括され論じられることもあった、学齢期に親の移住先社会へと移住した移住者の子供たちの移住経験の微細な差異に留意した把握の必要性、②移住状況に規定される出身地及び移住先の生活経験の多様性への注目の重要性、の2点について論じる。